



嘉賞（かしょう）

今日は後輩が大幅な遅刻をしてきた。してきた、というか、まだ会社に着いていないのだから、遅刻している最中である。

「何をやってるんだ全く」

いつもはかわいい後輩だが、何の連絡もなく、一時間も遅刻となると、これは叱ってやらねばなるまい。

私は携帯を取り出すと、かわいい後輩の電話番号におそろおそろかけた。

しかし後輩は電話に出なかった。

私は怒りを乗り越え、今度は心配になってきた。もしや事故にでもあって、携帯にも出られない状態なのではないか。

とりあえず私は、後輩にメールを送った。

「何してるんだ。遅刻だぞ」

返事は、12分後に返って来た。その文面がこれである。

「今、チューリップを保護しています」

私は目を疑った。チューリップを保護？一体、何をしているのか、想像もつかない。

子犬を拾ったとか、そう意味で保護と使うのはわかるが、チューリップの保護など、聞いたこともなかった。しかし、私が知らないだけで、なにかそういう活動みたいなものが、世の中で認知されているのかもしれない。そう思いなおした。そしてそれを知らない私を後輩に知られるのが怖くなって、こうメールを返した。その文面がこれである。

「そうか、それはえらいな。」

保護と言うからには、なにか良い活動なのだろう。

「ありがとうございます」

今度は即座にメールが返って来た。

しかし、先輩として、これでメールを終わらせるわけにはいかない。

「けど、それは仕事より優先することなのか？」

すると今度は15分後にメールが返って来た。

「ボランティア活動です」

「ボランティア活動？」

私はまたメールを返した。

「だからと言って無断で休むのはだめだ。ちゃんと会社に連絡しろ」

しかし、それから、いくら待っても返信が返ってこなかった。

私はデスクで耳かきをしている社長にとりあえず今の状況を報告しようと、席を立った。

「社長。後輩のことなんですが。」

「ああ、どうした」

「なんだか、ボランティア活動をしてるようで。連絡させるように言ったのですが、何か来ましたか？」

「いや。ボランティア活動ね…。じゃあ、今日はボランティア休暇だな。」

社長は付箋に何か書き込むと、机の端にぴっと貼りつけた。

「それでよろしいんですか？」

「ところで、なんのボランティア活動をしてるんだ？」

社長が興味を持つとは思わなかったので、私はあえて触れなかった言葉を慎重に取り出した。

「えー、チューリップの保護だそうで」

「ああ、チューリップの保護ね」

社長は、目の前にあった何らかの書類に、ばーんっと判子を押した。

やはり、チューリップの保護活動というものが、あるのだ。と私はこのとき確信した。知っているふりをして良かった。と心の底から思った。

とりあえず、私にできることはやった。そう思い、自分のデスクに戻った。

「ふー」

椅子の背もたれによりかかり、何気なく窓から外を見ると、社内の花壇の中に、傘をさしてしゃがんでいる人影があるのが見えた。私はぎょっとして、よく見ようと窓に近寄った。

よく見ると、その人影は、後輩だった。

私は思わずデスクから叫んだ。

「社長、あれを見てください。あんなところにいましたよ」

すると社長は特段驚きもせず、こう言った。

「偉いじゃないか。これで、ジュースでも買ってやんなさい」

社長は自分の長財布から、110円を取り出し、私に渡した。

120円なのに...

私はこっそり自分の10円を足して、自販機で桃のジュースを買った。

外に出ると、日差しが暑かった。

後輩は、土の上にしゃがんでいた。そこにチューリップが生えているのかと、私は目を凝らしたが、何も生えている気配はない。しかし、土の中まで透視できるわけではない。もうすぐそこに、チューリップが芽を出しているのかもしれない。しかし、変な質問をして、チューリップ保護の実態を知らないことがばれたら、元も子もない。私はその質問を心の中にぐっとしまった。

私は後輩のそばに寄ると、ジュースを差し出しこういった。

「ほら、社長からだ」

それと私から。それも心の中で言った。たかが10円ぽっちで、言えることではない。
後輩は、顔を上げた。

「あ、ありがとうございます。」

「がんばれよ」

私はそう言い残し、社屋に戻って行った。

【2016-08-16】指さし小説 第5話

<http://p.booklog.jp/book/109068>

今回のテーマは、嘉賞（かしょう）でした。いつもは韓国語の事典を使って指さししていたのですが、今回気分を変えて国語辞典でやってみたらいきなり難しい言葉が出たので、あわてて意味を調べました。というか事典なので隣りに意味が書いてあったのですが、上の人から褒められることだそうで、それでふと思いついた「チュールリップ保護」ということばをかけて、作ってみました。指さし小説をやっていると、知らない言葉にどんどん巡り合えて、勉強になりますなあ。みなさんもぜひやってみてください！

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109068>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109068>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ